

Emile Guimet エミール・ギメ（1838-1918）時代の 仏教と宗教学

フレデリック・ジラル

今日、東洋大学の国際哲学研究センターで自分の研究を発表する機会が与えられたことに、喜びと感謝の念を表します。特に、発表を勧めていただき、東洋大学へ御招聘の便宜をはかってくださった先生方、竹村学長、橋本先生、渡辺先生、岩井先生を始め、諸学兄に改めてお礼申し上げる次第であります。

東洋美術の歴史の中で重要な位置を占めているエミール・ギメ Émile Guimet (1838-1925) は、数多くの観光客に訪れられている人気のある地域に、東洋博物館を創立したことはよく知られている。但し、その創立者の構想こそがフランス人、ヨーロッパ人をはじめ、世界中からきている観客の東洋思想、東洋宗教、東洋美術に関する考え方を形作っていること、又、文化、学術知識の持ち主である観客に大きな影響を与えていることに注意すべきであると思われる。

このように影響力のあるギメは実際にどういう人物であったのか、又、どういう目的を目指していたのかが問題になる。さらに、実在のギメの意志、目標、希望は主に、東洋学博物館を建てる同時に、東洋に関する学識を流布すること、東西文化交流、人文科学、美術学の分野を広げること、又、新しい学問として所謂「宗教学」を設立したいということであったことに注意したいのである。

ギメは、リヨンの高ブルジョワ階級出身で、彼の父が創立した「ブルー・ギメ (Bleu Guimet)」で有名となった会社の社長の地位を受けながら、エジプト趣味に引かれた後、美術や演劇や音楽と共に、エジプトの宗教をはじめ、東洋考古学や宗教学の研究に手を付けている。エジプト学、東洋学、取り分け、ジョルジュ・ラファイエ Georges Lafaye (1854-1927) ¹ という学者と共に、イシス信仰を専門にしていた。ギメはイシスの宗教を死ぬまで研究し、特にギリシャ、ローマ、ガリヤ、ゲルマニア他の現地宗教との混淆を専門にしていることが、彼の出版物、「ローマのイシス」や「ガリヤのイシス崇拝者」を見れば分かる。又、そのイシスの混淆宗教の分析に際して目立つのが、プラトンや新プラトン主義的な解釈をも付け加えていることであるが、これは恐らく十七世紀のイエズス会のアタナシウス・キルヒャー Athanasius Kircher (1601-1680) の書いた『挿絵の中国』 (*La Chine Illustrée*) (1670 年) ² やモンフォコン Montfaucon などのイシス信仰の専門家の影響が見られる。

彼が東京についてすぐに、最初に訪問したのが、江ノ島の弁財天である。又、日光の住職修多羅亮榮によって紹介された名古屋の長栄寺の住職から悉曇の手引き、悉曇摩多體文を手に入れた際に、長栄寺のそばの深嶋神社、宗像三女神、多岐理比売命、田霧姫命、田心姫命と那古野庄の深嶋弁財天について調べる機会があった。京都では、興聖寺で禅宗の齋藤竜閑にあってはいるが、お寺にも弁財天と大黒天の彫刻が収められていたので、ギメにとっては両方の神が普遍的な性格を持っていたと信じていたかもしれない。

しかし、彼の全体の業績、学問的な好奇心や方法論をみてみれば、ギメの日本宗教コレクション、特に彼が集めた日本仏教パステルや、神仏の彫刻、絵画を閲覧していくと、日本宗教の全体を理解する手引きになることに気がつく。それを明らかにしてくれたのが私の恩師であるベルナール・フランクである。

それ故、1880 年にギメ博物館が出来た同時に、ギメは学術出版物を主宰して「ギメ博物館紀要」と「宗教学歴史紀要」とを創刊したことは、あまり知られていないが重要な出来事であると思う。

一節 ギメの目指したことは何であろうか。

ギメはフランスの文部省から奨学金を得て、明治九年の夏、秋、冬にかけて、日本、中国、印度を訪れており、日本の宗教を研究テーマとして日本を訪れていた。

ギメはどのような目的で日本に学識見聞を深めに来たのかについては、『日本散策』を読むと、ある日本人がそのことを質問したところ、ギメは自分が新聞記者でもなければ、宣教や観光などの為に来ておらず、日本の宗教の研究のために来日したという返事で問答が終わっている。又、大津の日吉神社の有名な神主である西川吉輔の1876年10月30日の手紙では、フランスからカトリックの宣教師が大津、三井寺へ来ることを聞き、彼をやっつけに行つて論破してやると決意して、その宣教師を迎えにいつているが、ギメは自分が宣教師ではないと明らかにしたのであった。

実際、日本の法務省の明治9年9月5日付けの国立公文書文庫所蔵の文書を見ると、フランス法教師ギメは絵描きのレガメと一緒に、我が国仏教の景況見聞のために、日光、浅間、鎌倉、伊勢、奈良、京都の神社、寺院を巡覧することを許可する、と書かれている。その文書を見る限り、ギメは日本仏教の状況を見学するために、来日したのが確実である。但し、所感に過ぎないが、日本の宗教全体を研究しに来たのではあるが、以前よりホフマンの日本宗教、取り分け日本仏教に関する描写を読んでいたため、一番重要に思われたのがやはり、仏教だったということであろう。

ギメは年代的には19世紀と20世紀に跨がる人であるが、ある意味では完全に19世紀を象徴しているといえる。若い頃から自分の人生を自分で決め、一種の人間中心主義で人生を送り、理想と思ったことを勇敢に実現することに努力し、成功したとも言える。彼の業績を見ると、非常に幅広く、かつ驚くべき教養、ギリシャ、ラテンの古典のみならず、ヨーロッパの中世・近世の歴史や思想の学問も汲みとり、又、他国の文化への好奇心、歴史学、学問の方法論に注意しながら、自分の修身を完成し、自己の心を養った知識の持ち主である。また、一方では彼自身の人間的な態度もそれを表している。というのも、彼が父から受け継いだ家業のやりかたは、共和主義思想と合わさり、人間社会の上で、他愛的に、公正な態度で正義的に、又、平等的に自分の会社の雇用人を扱うように配慮しようとしている。そのようなところに人間尊厳という態度が目立つ。それは彼が信じていた、フランス風であるが、当時の理念であった社会主義の原理に基づいてとった態度である。但し、特に19世紀に、例えばドストエフスキーのような知識人の間に流行していたフーリエ（Francis Marie Charles Fourier, 1772生まれ）の思想にも基づいていた。

ギメは小さい時から美術的な感覚が発達しており、陶器、絵画、音楽に傾倒し、又学問、文芸、文学の造詣も深く、人間と社会の発展の中心をなす哲学、宗教の問題に深い関心を持つようになった。例えば、自分で作曲した音楽や、或は他の作曲家の音楽を、町の中で行列を作り、会社の雇用人に演奏させたりしている。そういうふう雇用人を動員して彼の考えでは自分の会社の中で自分と会社員が一揃いでフーリエの理想に相応しい一種の家族を作るようになり、彼が考えた理想的な社会が出来ると思い込んでいた。このようなブルジョワ上級の社会主義が生まれたのはフランスの産物ではないかと思われるが、そういう思想はフランスの社会に深く根ざしているといえよう。

そういった思想の中にカトリック教会の作っていた伝統神学、道徳価値システムに反抗した思想が流れているため、無神論的な要素が大分入っており、キリスト教でない宗教、思想システムへの関心が深まり、多神教、神の存在を軽視し無視した儒教、取り分け仏教等は、近代思想の要求に応じるような宗教思想でもあった。特に19世紀には仏教はカトリックの神のような道徳権威がなく世俗的な哲学思想のように見え、知識人だけでなく、ギメと親しくなった政治家である社会主義者のジュール・フェリー文部大臣や頑固な性格で知られている大將軍の自由思想、日本趣味の深かったジョルジュ・クレマンソー大統領も非常に関心をもっていた思想であった。

●エミール・ギメ（1836-1918）年表

1836：生まれ

1860：蒼色家業を継ぐ

1865-1866 エジプト見学

1867：エジプト画、或る観光者の日記

1868：明治維新の年、ギリシャ、トルコ、ルーマニア旅行、画で見られたヨーロッパの東洋

1869：アルジェリヤ、チュニジア旅行

1871：チェルヌスキの日本見学

1872：『エジプト人のアジア』

1873：パリで第一国際東洋学会の極東部（中国、日本、インド、タタール）に参加

東洋と近代人類学、民俗学の方法論に関心を深める

1876：フィラデルフィアで万博でレガメや暁斎に合う。レガメと中国、印度、日本はフランス文部省奨学金で宗教調査に行く

26.8 横浜 2.9 東京、鎌倉、江ノ島、12-15.9 日光、上旬 .10 東海道、

4.10 箱根、9.10 名古屋、13-14.10 伊勢、16.10 京都、3.11 上海へ出発、
中国、一ヶ月間

印度、一週間

1877：三月フランスへ帰国。『日本散策』出版

1879：リヨンでギメ博物館創立

1880：『宗教学雑誌』、創立

1883：『ローマ風のイシス』

1884：ギメはフランス政府に博物館を寄付し

1898：『プルタルコスとエジプト』

1900：『ゴールのイシス崇拜教団』

1945：ギメ博物館が国立博物館になる

・ギメと交流のあった主な人物。

・有名人

榎村正直（1834-1896）*bijutsu fukoku* 美術富国 *hakurankai* 博覧会）と付き合う。

九鬼隆一（1852-1931）や福沢諭吉（1860-1862）に1884年、巴里で逢っている。

金澤、鎌倉、片瀬江ノ島へ Charles Wirgman（1832-1891）と見学する。Wirgman は *Illustrated London News*, 1861
や月刊の *le Japon Puch*（1862 à 1887）に記事掲載し、写真家の Felice Beato 1861-1867 と付き合い、又 小林清
親に逢い、学者の Ernest Satow と知り合い、画家の Georges Bigot（漫画 *manga*）と逢う、
東京と名古屋で 川鍋暁斎（1831-1889）と逢う。

・通訳者

通訳者は Léon Dury、日光と東海道と京都で近藤徳太郎、歌原十三郎（近藤は東京大学の前の段階の開成学校出身）

京都で富井政章等（1858-1935）が通訳してからリヨンでギメと仕事を続けている。

今泉勇作（1850-1931）は後に、リヨンで梵語、ラテン語、フランス語、考古学の仕事をギメ博物館で続けている。

山田多田清（1855-1917）

・神道の神主

佐八定潔（Sabache, Sōchi Sadakiyo）、レガメによる二十二・二十三歳の時の肖像

十月十三日十四日伊勢で 田中頼庸と浦田長民に逢う。

大津市で、ギメがキリスト教の宣教師かと疑問されて日吉神社の西川吉輔と問答する。（年、十月三十日の書簡）。

・仏教僧侶

修多羅亮延（1842-1917）、日光山門跡。

唯我韶舜（1804-1890）、浅草寺住職。

村田寂順／多喜寂順、妙法院門跡。

斎藤龍關（1831-1892）／良華、興聖寺住職。大教院の前教導職。

島地黙雷（1838-1911）、赤松連城（1841-1919）、渥美契縁（1840-1906）、西本願寺重役。

浄土宗の角谷隆音（1817-1883）、平家の末裔、西京聖光寺住職。

尊壽院住職の金光寺信元（1835-1898）。

日蓮宗の高麗智運（？－？）妙満寺住職。

山本藻助、経仏師。

・イシス信仰

アモン ゼウス ユピテル（主宰、天）

新プラトン派、ヘルメス聖典 *translatio graeca*：エジプトの神＝ギリシャの神（Hérodote 484-425）

オシリス デイオニソス バークス

オシリス ハデス プルト＝セラピス（イシスの夫＋アピスの牡牛）

オシリス＝カノベ（火之神、壺の中に死者の内臓を納める壺、水を吐く人間の頭の壺、ローマ、ポンペイ）

イシス デメテル セレス

イシス イヨ、プロメテウスの娘（XIVe s.）

ホルス アポロ 男性のヘカト

童子ホルス Har-pe-hered = ハルボクラト Harpocrate（エロス羽童子）

青年ホルス = Aroëris（密儀の沈黙の神）

三頭、蛇體のセルベル Signum triceps（獅子＝現在、犬＝未来、狼＝過去）（輪廻無常の時間）

トットー野生犬頭アヌリス ヘルメス メルクル （智慧、文字）

マルシル・フィサンの『プラトン神学』1482によればエジプトとプラトンとキリスト教の宗教哲学は同じく真理と愛としての神を明らかにする。ヘルメス・トット聖典はプラトンの哲学や福音の源であってオシリスの神話はキリストのバッションに準える。ヘルメスの象徴たるカデューシェ（ケルケイオン）はオリヴィエの枝を捲る蛇からなっていて弁舌や商売や医学の象徴でもある。仏敵の悪魔を降伏するクリカラ不動の形に似ている。

殺されてナイル川に捨てられたバラバラの體のオシリスは奥様のイシスによって甦らされてホルスを生ませる。オシリスは豊穡と再生の象徴のナイル川とされてセラピス・オシリスと牡牛のアピスの合一神として土地、豊穡、言葉、植物、再生の神、あの世の神の長い髭の老人、ハデスの形で（犬、狼、獅子）三頭の犬を側に時間と永遠の神と植物の冠を被って農業豊穡の神。

カノプという名前で知られ聖水、再生の豊富な植物としてデイオニソスと合一されて、オジリスはミイラの形で手に権杖と鞭をもって羽の入れた宝石冠を被ってローマやポンペイで死と再生の密教的な儀式の本尊とされていた。

プルタルコスによればオシリスはナイル川でイシスはナイル川で養われている土地でホルスはその土地から出た植物、食べ物等を表している。各の神は合理的に説明されて一つの宇宙的な原理を表し、象徴的な形をとった哲学的な概念に当たるものである。その世界観には神々の上にある摂理に治められてギメは仏教の因縁に例えている。

イシス崇拜はギリシャ風のオシリス神話の主宰として豊穡、農業、結婚、社会秩序の女神のデメテルと融合してエレウシスの密儀の本尊として運命の神としても近世ヨーロッパで崇められた。

16世紀にヒエログリフへの関心とイシス銅板の発見はイシス崇拜を復興させながらエジプト神話の研究を進ませる。

イシス銅板はイシスを中心に三十五柱の神を描いている。各々の神は一つの役割を持ってその役割を表す一つの

動物の部分や一つの属性、道具を伴っている。イビスの顔トット、鷹の顔のホルス、死者の靈魂を導く犬の面のアヌビス、牡牛のアピスや鰐、スフィンクス、スコルピオ、ミイラや冠、玉、首飾り、棒、錫杖、スケプトルム、壺、偽物の解説出来ないヒエログリフ等は何回も複写されている。1559年にエネアス、ヴィーコの複写が有名。完璧な宗の世界を描くこの銅板はエジプトを出発点としてすべての国のすべての神、神の動物や象徴や属性の比較目録を作る考えを与えた。この銅板を註釈してロレンゾ・ピニョラは1615に印度へ行ったセロステイスやオシリスの伝説によって比較宗教学を企てている。アテナシウス・キルヒャー1601-1680はエジプト、印度、中国、日本、ヨーロッパ、アメリカの神々を新プラトン派的な汎神論的な解釈 *lectio idealis* で宗教、神学、テオソフィア、哲学を同一視して膨大なエジプトのエディプス1652略して絵図の中国1670を出版した。彼の哲学では世界は四つのレベルをわけて神々が表している宇宙のアイデア、元素的な概念からなっている。この四つのレベル（アイデア、理性、天上、元素世界）は眼に見えない神的な中心から出ている神々によってお互いに通じ合うとする。アモンはすべてを照らす原理、最上神であってイシスは豊富な自然、月様ですべての形で現れている普遍的な母系的な自然界、受け身の原理であるのに対してオシリスは能動的な原理である。ホルスは所動と能動の両面を合わせた原理である。三人とも三角的なトリアドとなっている。神々、ヒエログリフや漢字、属性等の習合によって宇宙が *emanatio* 流出 *resortio* 帰着の両過程で救済的なプロセスが進んでいる。

ギメの見ていた宗教観では神々の姿や属性、道具の役目など哲学、形而上学、合理的に組織された概念の世界であっただろうか。

・ギメの問答

I. Création 造物、造物者有無

神道 造化三神即天御中主神。禪 唯心ノ所現。日蓮 小乗魔醯首羅天「神名」造作 大乘説因縁所成、真宗 本有自然ノ理、浄土宗 衆生一心 真言宗 正報業感、依報自在天梵天、天台宗 能造主宰不立、萬物心造法、因果、真如

II. Puissance et vertu du Hotoké 幸災、威徳、地獄天国の果報の主宰

Juge et sujet de la rétribution des actes 禍福所由

神道 神の威徳。禪 無し。日蓮 小乗業、大乘真妄、真宗 自己ノ因縁ヨリ感招、浄土宗、真宗 因果自然ノ常理、隔絶セル古今ノ變化、浄土宗 自業内因、佛神主宰賞罰外縁、唯心所造 真言宗 地獄或ハ天堂エ到ルハ自業自得、天台宗 法身般若解脱ノ三徳、常樂我淨ノ四徳、十力四無所畏等ノ威徳

III. Miracles, Effets magiques 奇特、法力怪異

神道 無し。禪 無、神通力。日蓮 神通力、不思議、真言宗 因果自然の常理、浄土宗、真言宗、神通不思議、天台宗 禪定智慧咒力發得、神通自在

IV. Vie future 來生、心魂未來ニテ生死有無

神道 天に魂不滅、罪惡人魂不歸天。禪 心性不生不滅。日蓮 人魂漸滅セサル、真宗 三世展轉シテ無盡ナレハ三世即チ無始無終ナリ、浄土宗 人魂至処ハ此魂此身内、真言宗 三世因果、天台宗 成毀アル者ハ肉身ナリ始終ナキ者ハ心魂

V. Morale 心理（修行）、心を理ム、耶蘇教の十戒

神道 神所賦の魂自識善惡邪正是非忠孝、神魂歸天。禪 贅沢な質問。日蓮 五戒十善、諸惡莫作衆善奉行、真宗 「諸惡莫作 衆善奉行 自淨其意 是諸佛教」「通戒偈」、浄土宗 本律寺、遁世寺、官寺三寺、真言宗 戒法ヲ護持 天台宗 修心、戒定慧

VI. Histoire et doctrine 佛教主意大概、宗旨の來歴、來歴と教示

神道 造化三神、機能の萬神、人、神武。禪 諸惡莫作衆善奉行自淨其意是諸佛教」教外別傳不立文字。日蓮 佛界因果ノ功德受得、真宗 因縁生起ノ法理、浄土宗 十界同一佛性、真言宗 我身即チ佛身、天台宗 顯密禪ノ三

VII. Culte des mânes et des esprits 鬼神、Dieux japonais et Buddha 神と佛、佛説神、漢神、國神

神道 行：威儀作法清浄、誠敬。禪 天部佛法守護ノ善神 租税ヲ納ムル。日蓮 隨機縁崇奉、漢神崇敬セス、真宗 阿彌陀佛ヲ信奉スルノ外別ニ奉スル所ノ神ナシ 餘ノ宗旨ニ佛ノ變化身、浄土宗 權實二神、三国五行訖神 真言宗 神徳靈妙不測、國家守護佛法擁護、大國主 = 大黒神後人憶説、天台宗 神則佛 佛則神

VIII. Textes sacrés de base 所依の佛經、佛祖書目

神道 古事記、日本書紀、大日本史等。禪 『臨濟録』。日蓮 真宗 浄土宗 真言宗 天台宗
追加 真言宗 印ノ義

・書誌学。

Emile Guimet : *Promenades japonaises*, G. Charpentier, 1878

青木啓補訳『ギメ日本散策、レガメ日本素描紀行』新異国叢書第二輯、雄松堂出版、1983

Frank, Bernard : *Le Panthéon bouddhique au Japon : Collections d'Emile Guimet*, Musée National des Arts Asiatiques Guimet, Paris, 1991.

フランク、ベルナルド『甦るパリ万博と立体マンガラ展 図録 - エミール・ギメが見た日本のほとけ信仰』フランス国立ギメ美術館創立 100 周年記念、西武百貨店、1989

Keiko Omoto, Francis Macouin : *Quand le Japon s'ouvrit au monde*, Découvertes Gallimard, Réunion des Musées nationaux, Paris, 1990

『日本の開国：エミール・ギメあるフランス人の見た明治』尾本圭子、フランシス・マクワン著；尾本圭子訳、大阪：創元社、1996

『1876 ボンジュールかながわ、フランス人の見た明治初期の神奈川』、エミール・ギメ著、青木啓補訳、有隣堂、1977

Bibliographie.

Annales du Musée Guimet, 1880, tome I ; *Montai ryakki : Fu Kyōgi ryakutō*, Tōkyō et Kyōto 1877.

Asahina, Michiko 朝比奈美知子 (compilé et traduit par) : *Furansu kara mita Bakumatsu ishin - 'Iryusutorashion Nihon kankei kijishū'*^a - フランスから見た幕末維新イリュストラシオン日本関係記事集, Tōshindō 東信堂, Tōkyō, 2004.

Aubaud, Camille : 'Anamorphoses d'Isis dans l'oeuvre de Nerval'^a, Texte de la communication au Groupe Hugo du 21 octobre 1989 (inédit) .

Bertrand (L' Abbé) : *Dictionnaire Universel, historique et comparatiste de toutes les Religions du Monde*. 4 vol. in-4. Paris 1848. Cote de la bibliothèque du musée Guimet : ARCH T.II. Cote 3385-3386, 2t.38 II.

Bonjāru Kanagawa, Furansujin no mita Meiji shoki no Kanagawa 『ボンジュールかながわ、フランス人の見た明治初期の神奈川』, Emīru Gime-cho エミール・ギメ著, Aoki Keisuke-yaku 青木啓補訳, Yūrindō 有隣堂, Tōkyō, 1977.

Breen, John & Teeuwen, Mark : *Shinto in History: Ways of the kami*, University of Hawaii Press, Honolulu, 2000, 384 pages.

Buttin, Odile : *Construction d'un grand musée de province au XIX^e siècle, le Musée Guimet de Lyon 1879-1888*, École du Louvre, monographie, 1991-1992, 22 pages, 12 planches, illustrations.

Chappuis, Fr. et Macouin, Francis (sous la direction de) : *D'Outremer et d'Orient mystique, les itinéraires d'Emile Guimet*, Editions Findakly, Paris, 2001.

Congrès International des Orientalistes, Premier Congrès des études japonaises, 1^{re} session, 1873, à Paris, de 1873. Nous avons consulté l' exemplaire conservé au Shidō bunko, à l'université Keiō, Tōkyō.

Darmesteter, James : *Essais orientaux. L'orientalisme en France. Le Dieu suprême des Aryens...* In 8 ∞ Paris, Librairie centrale des

- Beaux-Arts, A. Lévy, éditeur, 1883, 279 pages. Cote de la bibliothèque du musée Guimet : 12-VI 5983.
- De Milloué, Léon : ' Notice sur le musée religieux fondé à Lyon par Émile Guimet ^a, Revue de l' histoire des religions, t. I et II, 1880.
- Idem : *Le Bouddhisme dans le Monde, Origine - Dogmes - Histoire*, par L. de Milloué, Conservateur du musée Guimet, avec une Préface par M. Paul Regnaud, Professeur de sanscrit à la Faculté des Lettres de Lyon, Paris, Ernest Leroux, Éditeur, 1893; réédité avec des additions et des corrections sous le titre *Bouddhisme*, Ernest Leroux Éditeur, Paris, en 1907, X + 258 pages.
- De Rosny, Léon : *Le Positivisme spiritualiste. De la méthode conscienciente et de son application en ethnographie*, 1879.
- Idem : *La Méthode conscienciente, essai de philosophie exactiviste*, 1887.
- Exposition Universelle, Galeries historiques – Trocadéro. Religions de l'Extrême-Orient : Notice Explicative sur les objets exposés par M. Émile Guimet et sur les peintures et dessins faits par M. Félix Régamey, Paris, Ernest Leroux, Editeur, 1878.
- Frank, Bernard : *L'Intérêt pour les religions japonaises dans la France du XIXe siècle et les collections d'Émile Guimet*, Paris : PUF, 1986.
- Idem : *Le panthéon bouddhique au Japon : Collection d'Emile Guimet*, Musée National des Arts Asiatiques Guimet, Réunion des musées nationaux, Paris, 1991, 335 pages, 272 illustrations.
- Idem : ' *L'image du bodhisattva Seishi du Kondō du Hōryūji retrouvée au musée Guimet – Le dossier documentaire* ^a, Arts asiatiques, XLVII, 1992.
- Furanku, Berunaru フランク、ベルナルル : *Yomigaeru Banpaku to rittai mandara-ten zuroku - Emīru Gime ga mita Nihon no hotoke shinkō* – 甦るパリ万博と立体マンガラ展図録 – エミール・ギメが見た日本のほとけ信仰 – Furansu kokuritu Gime bijutsukan sōritsu hyakushūnen kinen フランス国立ギメ美術館創立 100 周年記念, Seibu hyakkaten 西武百貨店, Tōkyō, 1989.
- Fujishima, Ryauon [Ryōon] : *Le bouddhisme japonais, doctrine et histoire des douze grandes sectes bouddhiques du Japon*, Paris, Maisonneuve et Leclerc, 1889. Réédité par Bernard Frank avec une postface et des notes: *Les douze sectes bouddhiques du Japon*. Paris, Éditions Trismégiste, 1982, XLIII + 189 pages.
- Girard Frédéric : ' *Réfutation de la doctrine pernicieuse*, Sessō et les moines de son époque ^a, *La Rencontre du Japon et de l'Europe, Images d'une découverte*, Actes du troisième colloque d'études japonaises de l'université Marc Bloch, Centre européen d'études Japonaises d'Alsace, Département d'études Japonaises de l'Université Marc Bloch, Publications Orientalistes de France, Strasbourg, 2006, pp. 109-121.
- Idem : *The Approach of a European towards Japanese Religions: The Dialogues of Emile Guimet with Japanese Monks and Priests, Yoroppajin no Nihon shūkyō heno apurōchi - Emīru Gime to Nihon no sōryo kannnushi tono mondō* ヨーロッパ人の日本宗教へのアプローチ – エミール・ギメと日本の僧侶, 神主との問答, Kokusai Nihon bunka kenkyū sentā 国際日本文化研究センター, Kyōto, 2010, 48 pages. (en japonais)
- Guimet, Émile : *Promenades japonaises*, Illustrations de Félix Régamey, G. Charpentier, Paris, 1878, 212 pages.
- Idem : *Promenades japonaises : Tokio-Nikko*, Illustrations de Félix Régamey, Paris, G. Charpentier, 1880, 288 pages.
- Idem : traduction japonaise des *Promenades japonaises*, G. Charpentier, 1878, par Aoki Keisuke 青木啓輔, *Gime Nihon sansaku* ギメ日本散策, *Regame Nihon sobyō kikō* レガメ日本素描紀行, Shin.ikoku sōsho, dainishū 新異国叢書第二輯, Yūshōdō shuppan 雄松堂出版, Tōkyō, 1983.
- Idem : ' Plutarque et l'Égypte ^a, La Nouvelle revue, Paris, 1898, Tome 110, p. 454-469, 637-652.
- Idem : ' *De l'Asie des Égyptiens* ^a, Lyon : imprimerie d' Aimé Vingtrinier, 1872.
- Idem : *Huit jours en Inde*, 1876-1882. Réédition Phebus, Paris, 2007, 165 pages.
- Idem : ' Le Dieu d'Apulée ^a, *Revue de l'histoire des religions*, 1895, t. 32, p. 242-248.
- Idem : ' L' Isis romaine ^a, *Comptes rendus de l'Académie des inscriptions et belles-lettres*, 1896, p. 155-160, 18 pl.
- Idem : ' Les Isiaques de la Gaule ^a. *Revue archéologique*, 1900, I, p. 75-86 ; 1912, XX p., 197-210 ; 1916, III, p. 184-210.
- Idem : ' Lao-Tzeu et le Brāhmanisme ^a, *Verhandlungen des II. Internationalen Kongresses f,r Allgemeine Religionsgeschichte in Basel 30. August bis 2. September 1904*, B.le : Helbing & Lichtenhahn, 1905, p. 168-183.
- Jablonsky : *Pantheon Agyptorum*, Francof, ad Viadr., 3 volumes, 1750, gr. in-8 ∞ .
- Jourrel, Louis Jean-Baptiste de : *Religion Fusionienne ou Doctrine de l'universalisation réalisant le vrai catholicisme*, Chez M. Victor Choque, Paris, après 1863, en 1864 (?) (recueil posthume publié après la mort de son auteur, 1802-1863) . A. Charles, Paris, 1902.
- Kaempfer, Engelbert : *Reproduction dessinée du Grand Buddha du Hōkōji de Kyōto, édifié par Toyotomi Hideyoshi*, British Museum, MC

SI Ms 3060 fol. 144.

Kircher, Athanasius : *La Chine d'Athanas Kircher de la compagnie de Jesus, illustrée de plusieurs monuments tant sacrés que profanes et de quantité de recherches de la nature & de l'art. A quoy on a adjousté de nouveau les questions curieuses que le serenissime Grand Duc de Toscane a fait depuis peu au P. Jean Grubere touchant ce grand empire. Avec un dictionnaire Chinois & François*, A Amsterdam, Ches Jean Jansson à W aesberge, & les Hériers d'Elizée Weyerstraet, l'An clōclclxx. Avec Privilège. (1667, traduit en français en 1670). Partie de : *Oedypus Aegyptiacus*, trois tomes (1652-1655), *Iaponiorum & Tartarorum idolatriacae parallela*, t. III, Synt., 1.

Lenoir, Alexandre : *Nouvel Essai sur la Table Isiaque*, Paris, 1809. Dans Tome II de Lenoir...1809-1821.

Lichtenberger, Frédéric Auguste : *Encyclopédie des sciences religieuses*, XIII tomes, Librairie Sandoz et Fischbacher, Paris, 1877-1882.

Loewenthal, Édouard : *Le Cogitantisme ou la Religion Scientifique basée sur le Positivisme Spirituel*, A. Lanier, Imprimeur-Éditeur, 8^o, Paris 1886, p. 1-20. Cote : 13322 Arch. A-V ; 874 II.

McDermott, Hiroko : ' The Hōryūji Treasures and Early Meiji Cultural Policy ' , Monumenta Nipponica, n^o 61-3, Autumn 2006, pp. 339-374.

Meiji bukkyōshi hensanjo 明治佛教史編纂所 (Institut d'histoire du bouddhisme de l'époque Meiji), Tomomatsu Entai 友松圓諦 (compilé par), *Meiji bukkyōshi hensanjo shozōmokuroku* 明治佛教史編纂所所藏目録, *Catalogue de la Bibliothèque de l'Institut d'histoire du bouddhisme de l'époque Meiji*, Tōkyō, 1972.

Millioud, Alfred : ' Histoire du couvent catholique de Kyōto (1568-1585) ' , Annales du Musée Guimet, Revue de l' Histoire des Religions, Paris, 1895.

Idem : ' Esquisse des huit sectes bouddhistes du Japon par Gyau-nen ' [Gyōnen (1240-1321) : *Hasshū-kōyō*], Revue de l'histoire des religions, 13^e année (Paris, 1892), tome XXV ; tome XXVI.

Milloué, Louis de : ' Notice sur le musée religieux fondé à Lyon par Émile Guimet ' , Revue de l'histoire des religions, tomes I et II, Paris, 1880.

Montai ryakki 『問對略記』, *Shimaji Mokurai zenshū* 島地黙雷全集、daigokan 第五卷、Honganji shuppanbu 本願寺出版部、Kyōto 京都、1976.

Idem : *Nihon no kaikoku* 日本の開国 : *Emiru Gime aru furansujin no mita Meiji* エミール・ギメ あるフランス人の見た明治, Omoto Keiko, Furanshisu Makuwan 尾本圭子, フランシス・マクワン著 ; Trad. Omoto Keiko 尾本圭子訳, Sōgensha 創元社, Ōsaka 大阪, 1996.

Shō-houn Osho 松雲和尚, fondateur du temple des cinq cents génies, à Tōkyō. Statue en bois peint du XVII^e siècle : la barbe postiche qui orne le visage émacié, ne nuit pas à la valeur artistique de l' oeuvre.

Autel du Temple des Cinq Cents Génies (Tokio) .

' Ru•mondo•iryusutore ' *Nihon kankei sashie-shū* 『ル・モンド・イリュストレ』 日本関係さし繪集, Yokohama kaikō shiryōkan 横浜開港資料館, Yokohama, 1988.

Sueki Fumihiko 末本文美士, ' Shiiboruto/Hofuman to Nihon shūkyō ' 「シーボルト／ホフマンと日本宗教」 (Siebold, Hoffman et les religions japonaises) , *Kikan Nihonshisōshi* 『季刊 日本思想史』, n^o 55, 1999, pp. 26-42. Traduction allemande : Siebold, ' Hoffmann und die japanischen Religionen ' . *Bochumer Jahrbuch zur Ostasien-forschung*, Bd. 26, 2002.

Vernes, Maurice : ' Introduction ' , Revue de l'Histoire des Religions, Annales du Musée Guimet, Première Année, Tome Premier, Paris, Ernest Leroux, Éditeur, 1880, 1-17.

Von Siebold, Ph. Fr. : *Nippon, Archiv zur Beschreibung von Japan, Und Dessen Neben- Und Schutzl%ndern : Jeso mit den S, dlichen Kurilen, Krafto, KooraŌ und den Liukiu-Inseln, nach Japanischen und europ%ischen Schriften und eigenen Beobachtungen*, bearbeitet von Ph. Fr. Von Siebold. *Abtheilung V. Pantheon von Nippon*. Abtheilung Ō Leyden, Bei Dem Verfasser, 1852. pp.1-186, + tables LXXIV.

Saint-Martin (Louis-Claude de) : *Tableau naturel des rapports qui existent entre Dieu, l'Homme et l'Union*. In-12, Edimbourg (Lyon). Cote : 1782. 4793 33-VI).

注

- 1 *Histoire du culte des divinités d'Alexandrie hors d'Égypte*, 1883. Georges Lafaye, *Histoire du culte des divinités d'Alexandrie, Sérapis, Isis, Harpocrate et Anubis, hors d'Égypte : depuis les origines jusqu'à la naissance de l'école néo-platonicienne*, Paris, Thorin, 1883.
- 2 ギメ博物館の図書館に収められているのでギメ自身が読んだと推測出来る。又、*Vera & genuina mensa Isiaca, sive tabulae Bembinae interpretatio* という書物も所蔵されている。